

Title	異業態の銀行間合併のあり方に関する一考察 - 「規模」「収益性」「安全性」の視点からの計量分析とケース分析を基に -
Sub Title	
Author	磯部章代(Isobe, Fumiyo) 中村, 洋
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2000
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2000年度経営学 第1568号 不可
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002000-1568

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

所属ゼミ	中村 研究会	学籍番号	89928062	氏名	磯部 章代
(論文題名)					
<h2>異業態の銀行間合併のあり方に関する一考察</h2> <p>— 「規模」「収益性」「安全性」の視点からの計量分析とケース分析を基に —</p>					
(内容の要旨)					
<p>本論文の問題意識は、最近増加傾向にある金融機関同士のM&Aと、金融機関の中でも扱う商品を異にする異業態金融機関間のM&Aが効率的かを明らかにすることである。</p> <p>本論文における目的は、まず統計的手法を用いてM&Aの評価を試みることと、次に統計分析とケース分析に基づいて今後の日本における銀行間のM&Aのあり方についてインプリケーションを導き出すことである。</p> <p>まず、M&Aの評価の分析を試みた。サンプルは1999年会計年度のTier 1自己資本の大きい順に日米欧の24の商業銀行を取り上げた。手法は「主成分分析」と「判別分析」を用いた。具体的には、各行の主要な経営指標を表すデータを「規模」「収益性」「安全性」に分けてそれぞれの主成分得点を計測し、マッピングをしたその上で、日本の銀行と海外の銀行、及び大型M&Aを経験している銀行と経験していない銀行をグループ分けして判別分析を行った。この分析により明らかになったことは、</p> <ul style="list-style-type: none"> ●日本の銀行は欧米銀行との比較において規模は遜色ないが収益性が低い。 ●日本の銀行は規模と安全性という軸では欧米銀行と判別することはできなかった。 ●大型M&Aを経験している銀行は、規模と収益性という軸では経験していない銀行と判別することはできなかった。 ●大型M&Aを経験している銀行は、規模と安全性という軸では経験していない銀行と判別することはできなかった。 <p>次に、異業態金融機関同士のM&Aの成果の違いを統計分析とケース分析により検証したが、異業態間のM&Aはかならずしも成果をあげることの証明はできなかった。バンカース・トラストを買収したドイツ銀行のように、カルチャーの違い等の理由から人材の流出が激しく、統合がスムーズに進まず合併効果が現れるのが遅れた例や、東京三菱銀行のように、多額の不良債権を抱えた収益力の弱い銀行同士の合併はあまり成果が現れない例があるからだ。</p> <p>以上から得られる今後の邦銀のM&Aに対するインプリケーションは、異業態間のM&Aを推進するだけでは収益力の向上には貢献しないということである。</p> <p>本論文の限界は、日米欧の銀行のM&Aを事例にとったためデータの収集が困難であり、その意味でデータの制約を回避することができなかったというところにある。</p>					